The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	感情から他者へ : 生の現象学による共同体論
Author(s)	吉永, 和加
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44650
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【42】

氏　　名	吉永和加（よしながわか）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　18075　号
学位授与年月日	平成15年7月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**感情から他者へ－生の現象学による共同体論－**
論文審査委員	（主査） 教　授　山形　頼洋 （副査） 教　授　里見　軍之　　助教授　望月　太郎

論文内容の要旨

フッサールは「第五デカルト的省察」において我々の他者経験の根本にある他者の存在の把握を論じた際、知覚された身体を基礎にして他者を志向性によって構成しようと試みた。この試みに対して、その論理の組み立てに対する内在的な批判とは別に、他者の第一の意味は世界の中に知覚の対象となって現れる身体的な他者ではなくて、人格的なものではないかという疑問が出されている。本論文の目的は、人格的な他者把握の可能性を感情に基づいて追究することにある。

本論文は三部構成をとる。第一部「志向的他者把握から情感的他者把握へ」においては、第一章でサルトルを取り上げる。まず、初期の作品『自我の超越』で、サルトルが他者の自我のみならず私の自我をも志向性によって構成された意識の対象としたことを紹介した後、『存在と無』における彼の「まなざし」と恥の感情に基づく他者論を検討する。志向性の具体態と考えられたまなざしの下で他者は主体としてではなくて、対象として把捉される。恥の感情は、私が他者のまなざしの前で対象となる経験である。他者は、私の恥の経験を通して、私の対象化を行っている主体として私に間接的に現れる。

第二章ではシェーラーの『同情の本質と諸形式』を中心に論が進められる。シェーラーは、志向性が他者を人格において捉えられないことを明確に理解して、志向性にかえて感情を他者把握の根本に据える。彼は、自己と他者とを情感的な生の体験流から分化したものと位置付けた上で、自己と他者との間に情感的な位階を定めることによって両者を隔てる距離を示し、両者の関係を構築する。自他の関係を一貫して共同感情ないしは共感で説明しようとするシェーラー理論は、他方で、未分化な体験流からいかにして私の自己性が形成されるのかという点についての曖昧さと、自他を分かつ距離を設定する情感的な位階をいつのまにか志向的な関係で理解せざるを得なくなっているという問題を抱えている。

第三章では、舞台は、ベルクソンにおける生命と共同体の関係に移され、そこで自己および他者の成立が生命あるいは共同体における個体化の問題として論じられる。ベルクソンによれば、生命は物質との関係で個体化される。生命の生命に対する機能である本能が、生命の物質に対する能力である知性とりわけ言語を媒介として、性質を変えることによって直観が成立することが明らかにされた後、個体性の原理は、直観による意識の持続としての把握に求められている。この問題は、さらに、ベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』において、自然の進化の結果である「閉じた社会」のいっそうの発展形態である「開かれた社会」と、その発明者にして推進者である神秘家・個人との関係から、生命の躍動の源泉である「愛の躍動」と、その根源にある愛としての神・創造主との関係にまで遡って論じられ

る。

第二部では、アンリにおいて問題が考察される。アンリは彼の生の現象学において、感情を彼の内在の存在論の立場から明らかにし、感情を志向性理論から解放するとともに、感情に生命の現れを見ることで、他者との関係を生命の共同体として捉え、感情を通して他者へと至る道を整備した。

第一章では、アンリの初期の『顕現の本質』と、中期の『精神分析の系譜』が取り上げられ、彼の内在の存在論と、それに基づく自我論・主観性論が瞥見される。

第二章では、超越を拒否することによって他者との通路が完全にふさがれたかに見える、アンリの内在に基づく絶対的主観性において、他者の存在をどのように考えるかが、『実質的現象学』の「共ーパトス」の章に基づいて考察される。志向性に基礎を置く他者論の困難は「他」の自我を捉えるこの難しさにあるのではなくて、絶対的主観性そのものが志向性による接近を原理的に拒むところにあると診断するアンリは、内在に基づく情感性としての主観性から出発して、他者経験を解明しようとする。そのとき手がかりとなるのが私の感情を規定する絶対的受動性の意味である。その受動性の意味をアンリは、私が私自身を絶対的受動性において受け取る情感性において生命が自己として現れる際の、その自己ー触発が、私と同じく内在を原理とする大文字の生命に依存していると理解する。この大文字の生命は、自己贈与、自己生成として、私の自己ー触発としての生命的自我を可能にするばかりでなく、また、他の生命個体の自己ー触発もそこに基礎付けられている限りで、「基底」と呼ばれる。この基底を通して、私の絶対的主観性は他の主観性へ、生命体へと、開かれている。

第三章では、生命個体としての私と、その私の自己性を自己ー触発として可能にしている大文字の生命すなわち「基底」との関係が、論者がアンリの宗教論と呼ぶ『我は真理なり』と『受肉』において、さらに展開される。具体的には、まず『我は真理なり』において、生命個体と基底との関係は、キリスト教における神と神の子・人間との関係をモデルに、「弱い自己ー触発」と「強い自己ー触発」との関係として理解される。次に、アンリの最後の作品『受肉』において、強い自己ー触発の内部でそこに基礎付けられて成立する複数の弱い自己ー触発の間の関係に焦点が当てられる。生命の強い自己ー触発のうちで私の生命が弱い自己ー触発として生まれるが、自己ー触発である限りにおいて私の生命は、快苦の情感性においてあり、したがって生命個体としての私は、情感的な存在として肉体である。その肉体の絶対的な自己受容において私の諸能力の原理としての力「私はできる」も受け取られ、私の所有となる。アンリは、この原身体である力能「私はできる」を、メーヌ・ド・ビラン独特の概念「抵抗する連続体」を使って展開する。とりわけ、ビランの身体概念の中に新たに皮膚（肌）の概念を導入する。この皮膚の概念を介してアンリは、私と他の生命個体としての他者との交わりをエロチズムに具体例を取って、力の能動・受動の関係として記述する。

生命個体としての他者への通路をアンリにおいていかに考えるかという問題は、早くからの論者の関心事で、論者は「共ーパトス」の読解においては、情動としての力とりわけ欲動に着目することによってこの問題に取り組み、また、カンディンスキーの抽象絵画を論じた『見えないものを見る』における感動や創造的パトスを力として捉え、力の展開としての表現行為において他者への接近の可能性を探っている。したがって、皮膚の概念に明らかとなる、能動と受動を二様態とする私の力能に基づく個体他者の経験の記述は、論者の求めていた他者論の要件を一応満たすことになる。

第三部では、情感性における自他関係と共同体の問題を総括し、その可能性と限界を画定するために、感情を自らの哲学の第一原理とし共同体や自我について感情に基づく様々な論考を残しているルソーが、考察の対象となる。情感的他者把握という仮説の検証と情感性に基づいて具体的に一つの共同体が創設される場合の問題点の検討とが、ルソーに託されることになる。第一章では、ルソーの想像上の共同体が吟味の対象となる。『不平等起源論』において人間本性の原理を憐憫の情と自己保存の内に見出したルソーは、前者を原理とする共同体として『新エロイーズ』のクラランの共同体を、後者を原理とする共同体として『社会契約論』における共同体を考案している。この二つの共同体の比較を通して、情感性の共同体論の考察にとって大きな示唆をもたらすのは、憐憫の情と、それを原理としたクラランの共同体であることが確かめられた後、その共同体の内包する様々な矛盾や、それが主人公の死によってのみ解かれることなどが分析され、そこから情感性を擁する共同体一般の脆弱さが指摘される。

第二章では、こうした共同体の脆弱さの根拠を見極めるべく、ルソーの共同体論が前提としている自己と他者との関係を問い、彼の感情に基づく自我論が、他者との関係の含めて考察される。ルソーにおける他者把握の失敗は、情

感性の他者把握の可能性に疑義を差し挟むものである。第三章では、この疑義が、他者との軋轢を深めて孤独へ向かった晩年のルソーの著作において考量される。まず、『ルソー、ジャン=ジャックを裁く』において、ルソーの考える正しい他者把握の方法を見る。他者を対象として把握することを否定して、感受性に受け取られた印象から他者の存在様式そのものに到達するというこの方法は、アンリ型の他者把握の原型をなすものであることが明らかにされる。次に『孤独な散歩者の夢想』を取り上げ、感受性の最も純粋なあり方であり、アンリの絶対的主観性とも重なる「存在の感情」において、いかなる他者が見出されるかが問題となる。そして、感受性において働く他者に対する引力と斥力という力の作用に着目し、ルソーにおいて引力は自己と他者との融合をもたらすが、斥力は他者を単なる対象に、さらには事物に等しいものに貶めることを明らかにした。ルソーには他者性一般についての理解が欠けている。彼は、自己が他者にとって他者であるという他者性は主張したが、他者が自己にとって他者であるという他者性は認めることができなかったと結論される。

こうしたルソーの失敗の内には、情感性における他者把握や共同体論の問題点が凝縮されている。他者性が重視されなければならない。情感性における自他関係が単に自他の融合を意味するのではないことを明確にしなければならない。そこで、アンリの身体論の考察から得られたように、情感性における一致が必ずしも感情における一致を意味しないという方向が改めて確認されるべきである。それを踏まえて、アンリやルソーが議論の中で用いた「力」と、その力による他者への接近のあり方が情感性において確定されなければならない。

論文審査の結果の要旨

それぞれ異なる独自の主張と方法とを持つ哲学者、サルトル、シェーラー、ベルクソン、アンリ、ルソーを、感情に基づく他者存在の経験という観点から一つの集団としてくくり、彼等の他者に関する理論を抽出して比較考量し、感情のうちに我々の他者把握の起源を見る他者論一般の特徴と輪郭を描き出すと同時に、その問題点をも合わせて整理するという点で、当該論文は満足すべき成果を挙げ得たと評価することができる。そのことは、1）この論文の構成が、関心を同じくする複数の哲学者の学説を単に並列的に比較検討するのではなく、それぞれの学説がお互いに補い合う形で有機的に結合され、全体として感情による他者経験の理論が組み上がるようになっているという形式上の事実からも確認できる。実際、志向性概念の極端な単純化である「まなざし」のもとで主体が対象化されるという他者論にとっての理論上の挫折が、サルトルにおいては、逆に私の対象化の経験に他ならない恥の感情において、私をまなざしている主体・他者の存在の間接的な経験へと反転する。これに対して、シェーラーにおいては他者との直接的なつながりが感情において目指されながら、自他の区別分離が問題になる時点で、再び志向性が感情のなかに舞い戻ってくる。この一種の悪循環を断ち切るべく、ベルクソンの生命の哲学における共同体論が導入され、シェーラーの言う生命的一体感としての共同感情の含意するものが、展開される。最後にアンリによって、まず、生命と感情と自我が統一的に理解された後、自我と他者との関係が生命を媒介とする生命個体間の関係としてメーヌ・ド・ビランの身体概念の再解釈に基づく力を用いて記述される。2）さらには、興味深いのは、このようにして組み上げられた感情による他者経験の理論が、論者によって仮説と見なされ、感情に基づくルソーの想像上の共同体において、検証されるということである。結論はシニカルで、『新エロイーズ』でクラランに創設される感情の共同体は破綻する。この破綻の原因は、ルソーの感情に基づく自我や他者についての考え方において、真の意味での他者の他性の意味がなく、肥大した自己のうちに飲み込まれてしまっているところにある。

このルソーの共同体の挫折は、感情的他者把握にとって一般化できる性格のものである。すなわち、感情から出発する他者論は、他者の経験を共感における自他の融合において捉えるので、逆に自己と他者とを分ける他者性が曖昧になるということである。この点を、アンリの身体論で展開される力と皮膚の概念において、執拗に追及したことは、本申請論文のもう一つの成果として評価されるべきである。

しかしながら、一つの共通の主題の下で、複数の哲学者を論じることから来る問題点を本申請論文が抱えていることも事実である。個々の哲学者のテキストの読解分析がいっそうの徹底性をもって実施されていたならば、より明晰でかつより内容豊かな論述が可能になっていたのではないかと惜しまれる箇所がいくつかある。具体例を挙げると、

サルトルのまなざし理論はより単純な形に書き直されえたであろうし、ベルクソンの直観に基づく個体性の原理は、分離を意味する知性と共同性を保証する本能との関数として、より説得力のある議論となっていたであろう。また、申請者がその問題の重要性を十分認識した上で正当にもこだわったアンリにおける力の概念に基づく他者への接近も、その概念の解像度があと少し上がっていたならば、その問題点も含めて、いっそう整理された仕方で提示されたことだろう。ルソーについても同じことが指摘できる。感情の共同体には二つの意味がある。ひとつは、感情一般の本質である情感性の絶対的受動性に基礎を置く生一般の共同性であり、もう一つは、たとえばクラランの共同体の愛のように、ある具体的な感情によって統一的に組織された共同性とである。この二つの意味の間の関係についてもう一歩踏み込んだ上でクラランの愛の共同体が分析されるならば、論者の言う「仮説」に対する「検証」の作業もいっそう説得力を増したことであろう。とはいえ、これらの指摘は望蜀の言であり、本論文はすでに主題の感情に基づく他者経験の解明と共同体論の考察とにおいて十分な成果を達成している。本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。